220306　【読了】　お金のむこうに人がいる@田内学
お金を取っ払って人を見れば、とたんに経済はシンプルになる。

【はじめに】
あなたにこう感じてもらいたいと思って、僕はこの本を書いた
「経済の問題は、専門家だけに任せるものではない。自分も考えよう。そのほうが未来の社会はずっと良くなる」

【第１部　「社会」は、あなたの財布の外にある。】
（第１話　なぜ、紙幣をコピーしてはいけないのか？）
働く人がいなければ、お金は力を失う。
社会は、あなたの財布の外側に広がっている。
税金というシステムを導入することで、一人ひとりにとっての価値が生まれる。そして、紙幣を手に入れるために、みんながお互いのために働くようになるのだ。
紙幣をコピーしてはいけないのは、「価値が薄まってしまうから」ではない。「みんなが支え合って生きていけなくなるから」

（第２話　なぜ、家の外ではお金を使うのか？）
すべてのモノは労働によって作られる
現代では、絶対的な権力がなくても、言語の伝わらない外国にいても、相手が提示した価格さえ払えば、他の人に働いてもらうことができる。
この交渉力が、お金が持つ1つのコミュニケーション力である。
お金を流せば、自然に労働が集積され、どんな複雑なものも作り上げることができる。
これが、お金のもう1つのコミュニケーション力、伝達力である。
この交渉力と伝達力こそが、お金が持っている力である。
あなたが消費しているのは、お金ではなく、誰かの労働だ。
お金のむこうには必ず人がいる。あなたのために働く人がいる。
個人にとってのお金の価値とは、将来お金を使ったときに、誰かに働いてもらえること。
誰かの労働が、何かの問題を解決する。

（第３話　価格があるのに、価値がないものは何か？）
価値の1つは、効用と呼ばれる使うときの価値である。自分がどれだけ満足したか。
価値のもう1つは、モノを売るときの価値である。つまり、価格である。価格とは、商売人にとっての価値である。
生活を豊かにするのは効用のはずだけど、効用を測定することができないから、価格というモノサシ

でとりあえず代用している。
喜んで働いてくれる人には、お金による交渉は必要ない。働きたくない人に働いてもらうときほど、強い交渉が必要になる。その結果として価格が高くなる。極端な話をすると、みんなが他の人のために喜んで働くなら、価格は存在しなくなる。
つまり、価格の高さは、「どれだけ働きたくないか」を表している。
お金を払って働いてもらう場合にだけ価格が存在する。
価値を決めるのはあなた自身だ！
モノの効用が、誰かを幸せにする。
みんなが働くことで、みんなが幸せになる。これこそ、本来の「経済」の目的である。

（第４話　お金が偉いのか、働く人が偉いのか？）
お金が発明されて、状況は一変した。自分の「未来」を考えられるようになった。元気に働ける時に労働を提供してお金を貯めておく。将来、働けなくなった時は、そのお金を使って食料を買えばいい。今だけを考えて暮らす生活から抜け出し、未来を手に入れることができるようになった。
もし1時間後に死ぬことがわかっていたら、お金をもらうことよりも、美味しいものを食べることを選ぶだろう。
働く人がいなければ、お金の力は消える。多くの労働をお金で買うようになった。
誰が働いて、誰が幸せになるのか、これを考えるのが重要。

【第２部　「社会の財布」には外側がない。】
（第５話　預金が多い国がお金持ちとは言えないのはなぜか？）
僕たちの預金残高は、銀行が借りている借金残高でもある。
預けているお金をいつでも取り出せるから、僕たちはお金を貸しているのではなく、保管してもらっていると信じてしまうのだ。
銀行が預金残高を増やすには、誰かに借金をしてもらうしかない。
裏の扉からお金を出して（貸付）、正面扉からお金を入れる（預入）。これを繰り返すことで、120兆円しかない現金が1200兆円の預金を作り出したのだ。
僕たちはただ貸し借りを大きく膨らませているだけ。
社会全体にとって重要なのは、お金を増やすことではなく、お金を流すこと。
お金は増減せずに移動する。
金融資産の正体は、日本銀行券や肩たたき券と同じく、将来の約束である。金融、つまり資金を融通してもらうことと引き換えに将来のお返しを約束させている。

（第６話　投資とギャンブルは何が違うのか？）
投資とは、将来のために使う労力

投機はお金の奪い合いだから、誰かが損をしても反対側で誰かが儲けている。損はあくまでも個人の問題であって、社会から何かが失われるわけではない。
投資で損をしても、お金が消えるわけではない。その事業のために働いてくれた人々に流れるだけで、全体のお金の量は変わらない。
投資の損は、事業の失敗を意味する。その事業に費やされた労働に対して、お客さんが感じた効用が少なすぎたということ。

（第７話　経済が成長しないと生活は苦しくなるのか？）
大事なのは、どれだけの労働が、どれだけの幸せをもたらすかである。
経済効果という言葉を聞いたときは、まず、「効用のよくわからない生産活動なのではないか？」と疑ったほうがよい。
GDPは、1年間に国内で新たに作られたモノの価格の総額を表している。これは、みんなが支払ったお金の総額であり、モノの生産のために流れたお金の量でもある。国全体の生活の豊かさを測ることができないから、とりあえず「モノの価格の総額」を表すGDPで代用している。

【第３部　社会全体の問題はお金で解決できない。】
社会全体の視点では、お金は増えることはなく、流れることに意味があった。別の言い方をすると、社会の中でのお金の役割は、労働の分配とモノの分配を決めること。
社会が抱える問題の中で、お金で解決できるのは、それが分配の問題の時だけ。
社会全体の問題はお金では解決できない。

（第８話　貿易黒字でも、生活が豊かにならないのはなぜか？）
貿易黒字とは、外国のために働くこと。今の生活を豊かにすることではなく、将来のために「労働の貸し」を作ること。
この労働の貸しがあるから、困ったときに外国に助けてもらえる。
労働の借りとは、外国に働いてもらった時に支払ってきた自国通貨の量である。

（第９話　お金を印刷し過ぎるから、モノの価格が上がるのだろうか？）
お金にできるのは、困る人を変えることだけ。
年金問題も、労働不足、モノ不足の問題が絡んでいる。根本的な原因は、高齢者が増加し、現役世代と呼ばれる働く人の割合が減少することにある。現役世代が減少していくと、生産力も減っていく。
必要なモノが手に入らず、生活できなくて困る人が出てくる。

（第１０話　なぜ、大量に借金しても潰れない国があるのか？）
政府の予算の配分とは、僕たちの労働の配分を表している。
働いて返すのは、働いてもらった時だけ。

格差は世代間ではなく、同世代の中にある。
日本という国の財布の中には、3つの大きな財布が入っている。政府の財布、個人の財布、企業の財布。使ったお金は消えてなくなるのではなく、どこかに移動している。政府の借金した1000兆円も、個人の財布と企業の財布に移動しただけ。政府が借金をした分だけ、個人や企業の財布のお金は増えている。どれだけ時間が経っても、そのお金はどこかに存在していて、誰かが相続している。政府が借金を返すために個人や企業から税金を徴収すれば、いつでも1000兆円を集めることができる。
社会全体で見れば、政府が借金を増やすとき、誰かが同額の預金を増やしている。
財政的に破綻した国に共通するのは、他の国に働いてもらい過ぎたことである。
働いてもらったのに、働いて返せなければ破綻する。
経済は社会全体の話だと思いながらも、実際には自分の財布の中だけを見てしまいがちになる。ここまで、現代社会で人々を個人主義に走らせている「お金への誤解」を解いてきたつもりだ。その誤解が、人々を、空間的にも時間的にも分断しているのではないかと僕は思っている。
空間的な分断の原因になっていたのは「財布の中のお金が自分の生活を支えている」という誤解であった。現実は、財布の外の空間で人々が支え合って生きている。
そして、時間的な分断、つまり世代間の分断を引き起こしている原因の1つが、日本政府の借金だろう。「現在の豊かな生活は、過去の人たちの蓄積のおかげだ」と言われても素直に喜べないのは、それと引き換えに大量の政府の借金が残っていると思うからだ。
だけど、これも誤解だった。政府の借金は、個人や会社の預金の裏返しだからだ。むしろ外貨を貯めて、外国に対しての「労働の貸し」を増やしてきたのだ。

（最終話　未来のために、お金を増やす意味はあるのか？）
改めて経済とは何かを考えないといけない。
僕たちが社会の運営に対して負担しているのは「働くこと」だ。働くことで何かを生産し、その成果を社会全体で分かち合う。その結果、僕たち一人ひとりの生活が豊かになる。これこそが経済。
「お金を支払うこと」が社会に対しての負担になるのではなく、「支払うお金を稼ぐために働くこと」が社会に対しての負担になる。
年金問題を話す時には、「1人の高齢者を●人の現役世代で支えている」という話を聞くのに、「1人の子供を●人の現役世代で支えている」という数字を目にすることが殆どない。1人の女性が産む子供の人数しか気にしない。現代の社会では、高齢者の生活は社会が助けるものだと考えても、子育てについては社会全体で助け合うという発想がなくなってしまったようにも感じる。
GDPを伴わない無償の助け合いは経済活動としてカウントされず、道徳の領域に追いやられている。少子化問題は、助け合いという経済の目的を忘れた現代社会を象徴している。人々が助け合って生活するために経済が存在していて、お金は助け合う手段の1つに過ぎないということを思い出さないといけない。
（おわりに　「僕たちの輪」はどうすれば広がるのか？）
お金を払うことは、輪の外側の人に問題解決を押し付けている

に過ぎない。必ず「誰か」が解決してくれている。
時としてお金が人の存在を隠してしまうが。お金の向こうには確実に誰かが存在している。その存在を思い出し、共有できる目的が増えていけば、「僕たちの輪」は広がっていく。